綜　　説

滿洲の溫泉瞥見所感

附　興安嶺下の名湯ハロンアルシヤン

高　安　愼　一

昭和16年の夏、偶々好機を得て幸にも滿洲溫泉の一部を巡覽する事が出來た、滿洲の溫泉については既に先人によつて屢々報告された處であるし、特に先年は畏友藤浪博士の詳細な記述もある、此上私の贅言は不要とも思はれるが、聊か獨自の見地からも、思出の爲に多少の記述を殘して同好の士の御參考に供したいと思ふ。

	溫泉名	所在地（直距離）		溫泉名	所在地（直距離）
1	安北溫泉	連京線松樹驛の東20粁	（イ）	硫黃溫泉	火山の頂上から南西8粁の中腹
2	剪子湯溫泉	安北溫泉の北東8粁	（ロ）	湯水長溫泉	火口湖天地から北側の中腹
3	龍門湯溫泉	連京線許家屯驛の南々東6粁	（ハ）	白溫泉	火口湖天地から北4粁の中腹
4	熊岳城溫泉	連京線熊岳城驛の南東2.5粁	（ニ）	天地及三池淵	白頭火山湖の一部分
5	思拉堡溫泉	連京線蘆家屯驛の南東7粁	20	五大蓮池火山溫泉	北黑線龍鎭驛の南西8粁
6	湯崗子溫泉	連京線湯崗子驛の近傍	（イ）	洗眼泉	老黑火山の南6粁
7	倪家台溫泉	連京線鞍山驛の東15粁	（ロ）	藥泉	老黑火山の南6粁
8	湯河沿溫泉	連京線遼陽驛の南東25粁	21	ハロンアルシヤン溫泉	阿倫線阿爾山驛の近傍
9	狗兒湯溫泉	安奉線本溪湖驛の東24粁	22	トルグアルシヤン溫泉	ハロンアルシヤ溫泉の東40粁
10	湯池溝溫泉	安奉線草河口驛北東28粁	23	興城溫泉	奉山線興城驛の東3粁
11	湯池子溫泉（鳳城縣）	安奉線鳳凰城驛の北々東9.5粁	24	湯上溫泉	奉山線綏中驛の北々西15粁
12	廟嶺溝溫泉	安奉線鷄冠山驛の南西25粁	25	熱水湯（凌源）溫泉	錦承線凌源北々東15粁
13	東湯溫泉	安奉線湯山驛の北東14.5粁	26	熱水塘（建平）溫泉	建平の東々北25粁
14	五龍背溫泉	安奉線五龍背驛の近傍	27	熱河溫泉	承德の北西避暑山莊內
15	湯池子溫泉（安東縣）	安奉線安東驛の南西12粁	28	三溝湯上溫泉	
16	勾湯溫泉	安東省岫巖縣城の北西16粁	29	毛金壩山熱水塘溫泉	承德の北々東53粁
17	湯池溝溫泉	安東省岫巖縣城の北々西9粁	30	默沁溫泉	平泉の北々西45粁
18	湯河口子溫泉	通化省撫松縣城の南60粁	31	英金河上流熱水塘溫泉	赤峰の西100粁
19	白頭火山溫泉	白頭山中	32	湯山溫泉	林西の西27粁

從來滿洲の溫泉として比較的多くの人に知られて居るものは、前頁に數へる樣な三十有餘のものである。

たが然し、實際實地について見ると、まだまだ人も知らない所に立派な溫泉が澤山に祕んでゐるやうである。少なくとも從來知られてをつた數十のものの他に、奉天省內や、熱河省や、安東省、通化省、或はホロンバイルの方面とかにもまだまだ知られない溫泉がいくらもあるやうで、これを總計すると恐らく百を以て數へねばならぬやうな數になると思ふ。卽ち滿洲國も又相當溫泉を持つた國であるといふことが出來る。從つてこの天與の資源を十分に利用してこれをたくみに用ひて行くことは、極めて必要な事である。滿洲國で溫泉療養を志す人は、わざわざ滿洲方面から日本內地にまで療養に來なくても、滿洲に適當な溫泉療養機關が出來れば、是を利用したらよいと考へられるのである。滿洲國の溫泉を短時日で見て巡つたところを綜合すると、第一に與へられた印象は、なかなか立派な溫泉が相當あるといふことである、すでに天下に有名な熊岳城、湯崗子、五龍背といつた溫泉は日本に於ても一流に屬するべき秀れた溫泉であり、その性質もまた湧出の量もその設備も洵に立派なものであるが、是等と反對に打ち棄てられた溫泉――未だ全く自然のままに放置されてゐる。溫泉湧出地が、他にも澤山殘されてゐる。一面には極端に設備のよい所があるかと思ふと、他の一面にはまた殆んど手も加へられないお粗末な所が中に澤山にある。換言すれば、兩極端があつて、その中間程度の設備を加へられた溫泉場はあまり無い樣に見受けられる。從つて現在大衆に向つて溫泉の利用といふことが、缺けてゐるのが現在の所滿洲國溫泉場の狀況である。日本では溫泉は大衆が、これを利用する。大衆の保健上からいつて仕事をした後の疲れを休めるといふ意味合で溫泉地を訪れて來る。そして健康の增進を圖つてゐる。滿洲では未だ日本の如くこれが十分に廣く徹底してゐない。これは遺憾な點であると思ふ。また滿洲國に於ける溫泉の設備について見ても、一部にはなかなか立派な豪華なものがあるが、どうも大衆を滿足せしむべき御手輕で能率の多い設備の點については未だ甚だ物足りない處も見受けられる。溫泉による治療を大衆化するといふことは、當然國民全般の保健の上にまた、當然考へられなければならぬ問題であるからである。別に滿洲國の溫泉について非常に喜ばしく思つてゐることは湯崗子にしても、熊岳城にしても、淫蕩的な或は廢頹的な氣分が無い事である。いかがわしい料理屋等が無いから、淸淨閑雅である。これは非常によい發達の途を辿りつつある事と感心した。將來とも、この方針によつて溫泉經營が進められるならば大變結構なことである。これは溫泉がその本來の面目を發揮し、その機能を十分に發揚せしめ得ると云ふ上について誠に喜ばしい事である。

日本に於ては溫泉場の空氣は、所によつては相當廢頽的なものもあつてこれを廓清するために現在いろいろの手段が執られてゐる。だが一度さういふ風に染つた所を廓清するのは、なかなか困難なことである。外國の溫泉を見ると日本の溫泉場におけるとは全く氣分が違ふ。それは本當に溫泉で療養をするのだといふ目的のために溫泉は出來てゐる。從つて溫泉に來てゐる人々もそのつもりで、靜かに溫泉の效果に浴してゐる。溫泉場に一度足を踏み入れると、全く淸淨閑雅安靜の感がする。そしてそこを通る人も、屋內の人もみな靜かな療養氣分を漲らしてゐる。これが溫泉本來の面目でないかと思ふ。

次に溫泉の質について感じた特徵は、滿洲の各所の溫泉が一般に成分の少ない稀薄な溫泉であるといふ事である。これは滿洲國の溫泉の一つの特徵である。此の含有成分が少いと云ふ事からして、或はその效果も亦餘り大したもんではなからうと思ふ人もあるかも知れぬが、それは甚だ早計である。溫泉が薄いから效がないといふことは決して云はれない。溫泉は薄いものであつてもその治療的效果の强い溫泉は到る所に見られるのである。日本に於ても例へば、山梨縣の下部溫泉は傷を癒すに非常に有效で廣く人に知られてをり、また近代科學の手によつて檢討されてその效果は疑ふ餘地のないものであると立證されてゐる。この下部溫泉は實に成分の稀薄な溫泉であつて恰も井戸水に近い位の溫泉である。然しこの下部が有效なことは、武田信玄が川中島での負傷を治療した以來、長い間戰國武士の保養所になつてゐたのみならず、實際傷の治療に用ひて有效であり、近代の學者が科學的な檢討を加へても明かにそれが認められてゐるのである。ところが、玆で知つて置かねばならぬことは、下部溫泉が傷に效くといふことからその中の成分を化學分析して調べ、それと同じ質のものを同じ樣な分量で寄せ集め、水に溶かし、人工で下部溫泉を造つてみると、その外見は一寸見たところは實際の下部溫泉—天然の下部溫泉に比して、色といひ、味といひ少しも變らないが、さてその作用を調べて見ると格段の相違がある。天然の下部溫泉は甚だよく傷を癒すのに拘らず、人工の下部溫泉は左樣には效かない。これは慶應大學と北海道大學の人々によつて實驗證明されてゐる。そんなら傷を癒すのに下部溫泉の何が原因するか、この原因を明らかならしめ樣といろいろな人が、研究に手を染めたが、今日未だその本當の作用因子といふものが判らない。

別府溫泉にある柳の湯が、傷を癒すのに有效で、これも矢張り薄い湯であるがこれは井上馨公爵が井上聞多と云つてゐた時分に有名にした湯で、公が刺客に襲はれ身に四十數ケ所の傷を負うた後に、それを治療した所だといふ事で大變傷に效くのである。これを材料にして我々の研究室でも、如何なるものが治療上の因子となつてゐるかを調べて見たがなかなか判

らない。北海道大學に於ても柳教授が矢張り定山溪や、登別溫泉に行つて傷に對する作用を詳しく調べたが、これも結局如何なる因子が傷を癒すのに有效であるかといふ眞相を摑むことは出來なかつた。結局溫泉の傷に對する作用は、まだまだ我々の知らない微妙な作用因子が天然の溫泉中には潛んでゐて、それが作用するのであらうといふ樣な事を考へられてゐる。天然溫泉が持つ微妙な作用は輕々しく推測を許されない程度の難かしいもので、ここが溫泉研究の困難なところである。また天然溫泉といつても新しいものと古いもの新しいといふのは、湧出してから新しいもの、卽ち汲取つてから時間の經たないものと、時間の經つたものとではまた作用の程度が違ふ。傷を癒すのは天然溫泉が一番良く效く、その天然溫泉の中でも新しいもの程よく效く、そして同じ天然溫泉にしても古いものはこれに次ぎ、人工溫泉は最も劣るといつた樣なわけになる。

さういふわけで溫泉が薄いからと云つて決してこれを輕蔑することは出來ない。薄い溫泉であつても强い作用をするものがあることは其他にも幾多實例があるので、下部溫泉の傷に對する作用や山口縣の俵山溫泉、これはレウマチ及神經痛に、有名な溫泉として事實上非常に卓效を表してゐるが、この溫泉がまた極めて薄い溫泉であるに拘らず、レウマチ神經痛をよく治療するので矢張りその作用の因子はこれを何處に求めてよいか現在の所まだ十分には是を說明が出來ない。そこで、かういふ樣な事實を廣く通覽して見ると、滿洲國に於ける溫泉が一般に薄いからと云つて、また、それが比較的多いからと云つて餘り效くまいなどと速斷してはならない。各溫泉はそれぞれみな秀れた特性を持つて出て來てゐるのであるから、療養上甚だ重要な性質を持つた溫泉であるといふことが出來る。そこで各地の溫泉の特性をしらべ、而してそれに適合した方針の下に開發を圖られるなら滿洲國にをられる方々の治療又は健康增進上に非常に有利に是を利用する事が出來る。

滿洲國に於ける溫泉のも一つの特徵は、川の岸にある溫泉が相當多數あると云ふ事である。例へば熊岳城にしろ、アルシヤンにしろその他の多くは川の岸にある。この川岸に溫泉があるといふ事は熊岳城に於ける砂湯の如き治療の方法によつて價値を增すといふ利便が非常に多い、また湯崗子に於ける如く泥湯による療法もあつてかういふ事は現在日本では行つてゐない方法で、特別の方法である。かういふ特長のある入浴のやり方、砂湯にしろ又泥湯にしろ、これ等は滿洲國には行はれてゐるので甚結構である、將來共益々發達せしめたいものである。

哈倫阿爾山溫泉

新京から西北へ、所謂京白線、白阿線を經て鐵路を進む事約一晝夜餘にしてホロンバイルの名湯ハロンアルシヤン溫泉に達する。私が玆に特に此の溫泉を摘記する所以は、此溫泉が古來治療效果顯著なる名湯として地方人士の尊崇篤く、人跡稀なホロンバイルの平原に幾日の旅を厭ふ事なく此の溫泉に集るもの、事變前は年に數千に上つたと云ふ盛況であつたに拘らず、何分にも土地が避遠に過ぎるがために邦人の是を訪ふもの少なく、知る人が稀であると云ふ事が一つ、次にも一つは溫泉治療學上から見て此溫泉が極めて興味深いものである事が特に私の感興を惹いたためである。

阿爾山溫泉も他の土地に於ける名湯の多くのものと同じ樣に、其の效能に關して古來から幾多の傳說を持つてゐる、今其の一二を揭げて見ると、

イ、傳說の1、創傷治癒についての傳說、遠き昔から圖拉爾や哈拉哈兩河の溪谷地帶は絕好の狩獵地であつて、蒙古の貴族連は好んで此地に獵り暮したのであつた、其の大汗の一人が或年の事、此地に來つて1日の狩を樂んだのであつたが、此の日は如何なる譯かトント不獵で、大汗の御機嫌が甚だ斜であつた處へ、不意に1頭の大鹿が現れたので大喜びの大汗は、早速手練の矢を飛ばしたのであつたが、不幸狙は狂つて僅かに大鹿の足を傷けたに止り、獲物は點々たる血痕を殘しつつ遠く逃れ去つてしまつたのであつた、大汗はいらつて其家來を叱咤し、直ちに追跡して是を捕へ來るべく命じたのであつた、血痕を追ふて遠くホロンバイルの山野を彷徨した家來は遂に一つの泉の傍に到達して其の血痕を見失ない、實に如何に其附近を搜索しても遂に此處以上血痕を發見する事が出來なかつたので、をそらくは負傷した鹿が此の泉によつて其の傷を癒し而して立去つたものであらうと考へざるを得なかつたのである、そこで彼はスゴスゴ立歸つて此の由を大汗に復命したのであつたが、是を聞いた大汗は是を信ぜず激怒の餘り、「泉に浴して傷が癒へるなら汝は身自ら是を證明せよ」と罵倒と共に彼の足を打つた、而して傷いた家來を其の泉の傍に運ばしめた、數日を經た後ち大汗は更に別の家臣を派して負傷者の模樣を窺はしめた處が、驚くべき事には彼の傷は全く癒へて濶步して居るのを見出し、直に是を伴つて大汗に見えた處が、此の奇蹟的事實に直面した大汗は大に驚倒して「是はをそらくは神意によつて此の不可思議な泉を敎へられたものであらう」と想ひ當り、直に此の事件の記念として泉に近き一丘上に小廟を建立し神を祠つたのであつたが、此廟は現在溫泉の傍に保存されてゐるものであると云ふ事である。其後ち大汗は更に此の溫泉湧出ケ所を花崗岩を以て圍み、王室所屬の溫泉と定めて、あらゆる病人に無料入浴を許したと云ふ事である。

傳說の2　內科病（？）に關するもの、是も遠き昔の事、北京に都を定めて全盛を極め且

つ其の善政によつて廣く庶民の信望悅服の的であつた一帝王が、病みて其病勢逐日篤く、醫藥、祈禱のあらゆる方法も殆ど徒勞に終り、今はただ無爲にして死を待つの外なき悲嘆に暮れて居つたのであるが、1日圖拉爾地方から來た1人の老喇嘛が侍醫を訪れて、帝王の病を癒すには溫泉に浴するより外に策なき事を進言した、既に萬策つきた周圍の人々は暗夜の光明を見るの心地もしたのであつたが、何分にも既に衰弱其極に達した病人を、遠く溫泉地迄運ぶ事が如何にも氣障はしい事であつた、然し遂に唯一の最後の希望として宮庭は溫泉行きを決行するに一致したのであつた。是より幾日の間、幾萬の人夫は急派され、夜を日についで北京から張家口を經て溫泉に至る道路の建設を行はしめたのであつた、而して將に死に瀕せる帝王は家臣に守られ幾日かの苦しい旅をつづけて遂に溫泉に到達し、此時既に意識を失つて居つた帝王は直ちに老喇嘛の指揮の下に溫泉に入浴せしめられた、入浴數分、病める帝王は徐ろに其の意識を恢復した、かくして日々の入浴は著效を奏し、病帝王は目に見えて輕快し來り、二週後には既に他人の力を藉らず自ら泉に到つて入浴を試みる事が出來る樣になり、遂に帝王は其の死病より不思議にも全快する事が出來たのである。

全快した帝王は泉の奇蹟を讃嘆した事は勿論であつたが、永く是を記念し且つ保存せんが爲に、此の地にある總ての泉を何れも石にて圍ふ事を命じ、花崗岩を以て幾十の浴地を構築整理せしめた、而して其の附近は是を聖地と宣し、狩獵を嚴禁して靈地を汚さざらん事をつとめた。後ち喇嘛僧は各泉の傍に標石を建てて入湯者の爲に各泉の特效を明示したのであつたが、此の時以來此の溫泉を訪ふもの次第に其の數を增し終に數千を數ふるに至つた。

以上の二つの傳說は其の代表的なものを揭げたのであるが、本邦各地の著效ある名湯の傳說とほぼ其趣を一にするは甚面白い事である、浴地が花崗岩を以て圍まれておる事は現に私も實見した所であるが、是について昭和9、10年の兩年に亘り此の地方に出張し阿爾山附近一帶の地質調査に當つた滿鐵地質調査所三石技師の談によれば、現在浴槽を圍める花崗岩と同質の石は阿爾山附近では發見する事の出來ないものであるから、是は往昔遠隔の地から運んで來たものに相違ないとの事である。尙石の細工が相當巧妙である點等も參照して考へて見ると、をそらくは北京より張家口—ウヂムチンなどを經由して溫泉に運ばれたものであらうとの事である。尙又溫泉場の外觀は其の創設當初より殆ど變化を見ないとの事であつて、只1912年に舊廟が破壞され且つ溫泉の適應症を標記した標石の若干が失はれ、又新らしき祭壇が造られたとの事である。此の新らしい祭壇はオボ（鄂博）と稱へられ山靈を祈る爲のものであつて、石及樹枝をピラミツド型に積上げて送られ、現在溫泉地の殆ど中央部に建立されて居る、1924年蒙古人トルグープトアンが其の盲目が癒つた事を感謝し、神に

謝意を表する爲に造つたものだと云ひ、一般蒙古人は此の處で祈禱を捧げる習慣となつて居る。かくして此の哈倫阿爾山溫泉は數百年前から地方人に知られ、其の效能は顯著なるものとして蒙古人は勿論其他露人、支那人の遠く來り訪ふものも多く、事變前迄は每年數千の人が集散して居つたとの事である。

ハロンアルシヤンの溫泉場は新京方面から鐵路によつて是に赴く時には、阿爾山驛に到着する直前に車窓から鐵路の東側、比高約二百米の阿爾山の西麓なる傾斜地に點在する事を望見する事が出來る、而して此處に40餘ケ所の泉源が包括せられて居るのであつて、此の各泉源上にそれぞれ露天の一浴槽を備へて居る、浴槽は大小種々であつて各花崗岩の角材をタタンで立派に造られて居る、主要泉源の點在する地域は南北に長くして約300米餘、東西に短かくして約50米の長方形の區域であつて垣により他と區別されて居る、凡て露天で其の間2 3の場所に脫衣場がある。阿爾山の驛及び固有部落は其の北方に近く、此處には先年滿鐵經營の溫泉ホテルが出來て居つて、溫泉湧出地域のほぼ中央部から引湯して居るのであつて、無色無臭透明にして且つ適溫の湯が多量に四時其の流れを絕えない。溫泉湧出量は其の全部を合算して目測一晝夜數千石に達するものと思はれた。

全部で40有餘ケ所の溫泉が全部同一の泉質であるか否かは、私が一通り一見しただけの經驗では何とも結論する事が出來ない。ただ現地の個々の浴地を巡覽して見ると、溫泉は概ね無色透明であるが、時に稍白湯を帶びたものがある例へば第17、18、19、20、37、及38號などの浴池である。

既往に於て哈爾賓東省鐵路中央醫院化學實驗室で露人ハルロウオイが分析したものを參考の爲に摘記すれば第1表の如くである。

第1表　溫泉分析表　　民國16年、ハロルウオイ氏による（哈爾賓東省鐵路中央醫院化學實驗室）

溫泉番號	1	3	9	10	15	19	22	31	21
N/10鹽酸	11.0cc	45.0	17.0	25.0	63.0	68.0	68.0	60.0	29.0
水色	—	淡黃	—	淡黃	—	—	—	淡黃	—
氣味	—	—	—	—	—	硫輕氣	硫輕氣	硫輕氣	—
透明質	淡白	透明	淡白	淡白	透明	透明	透明	淡白	透明
水味	清涼	—	—	清涼	硝酸	—	—	嘔吐を催す	清涼
溫度									
アンモニア	—	—	—	—	—	—	—	—	—
亞硝酸	—	—	—	—	—	—	—	—	—
硝酸	—	1.5瓩	6.0	—	±	—	2.0	4.0	2.0
鹽酸	—	2.0	12.0	—	27.0	28.0	21.0	26.0	10.0
硫酸	—	—	3.4	—	38.0	68.0	38.0	86.0	±

温泉番號	1	3	9	10	15	19	22	31	21
單純炭酸	88.0	—	—	—	—	—	—	—	—
	—	—	—	—	—	—	—	—	—
	±	—	—	—	—	—	±	±	—
酸素	11.8	6.0	12.0	9.0	2.8	4.0	6.0	5.0	—
混合物	156.0	1360.68	256.16	254.6	579.2	579.8	590.7	560.1	283.5
燒熱時損失	48.24	60.8	58.56	48.9	49.6	46.6	55.0	40.1	60.0
硅土酸化物	—	48.1	18.0	35.6	61.8	10.3	36.0	31.7	49.0
カルシューム	2.2	28.0	24.0	28.5	19.72	16.0	9.6	24.7	19.75
アルミニューム	16.28	43.6	19.2	23.3	15.2	12.1	22.65	11.15	14.5
マグネシューム	—	1.0	1.3	1.8	1.2	1.4	—	2.9	1.8
ナトリウム	8.6	—	37.6	14.2	202.7	132.5	180.3	126.1	—
カリウム	1.0	—	25.6	2.1	30.5	28.6	68.04	89.8	—
硫化水素	—	—	—	—	—	+	+	+	—
砒素	—	—	—	—	—	—	+	—	+
アンチモニー	—	—	—	—	—	—	+	—	+

此分析表を通覽して見ると、本溫泉はアルカリ性又は弱アルカリ性の單純泉に屬する、湧泉の溫度は各浴槽に於てそれぞれ高低の差異がある、既往に於て數氏が調査した處を揚げて見ると第2表の如くである、私も觀察の際、泉溫を計つて見たのであるが大體に於て先人の測つた處と殆同一であつたので玆に是を重複せしめない、ただ玆に注目すべき事は、先人の測つた數が、それぞれ年代や季節を異にして居るに拘らず、何れもほぼ類似で、私の9月2日に於ける數も亦大體類似であつたと云ふ事實である、其の上に私の目測によれば各泉の溫度はほぼ其の湧出量に關係する樣であつて、一般に湧出量の多い泉は泉溫高く、其の少きものは泉溫も亦低かつた事は否み難い事實であつた。尙又季節的溫度變化の少いものと大なるものとの兩種がある事に注意を要する。

第2表　各浴槽の溫度

浴槽番號	民國10年7月 イワノフロポクチニン	民國13年7月 中野	民國14年7月 カルニッキー	民國16年7月 中野	民國17年1月 イエリエツエーエーフ	民國10年8月20日 (門田)
1	1.0	0	1.8	1.0	1.0	—
2	1.0	0	—	1.0	1.0	—
3	21.5	20.0	21.0	18.0	10.3	16.0
4	25.5	25.0	23.4	21.0	14.0	18.0
5	32.0	31.0	33.2	31.0	24.0	26.5
6	35.0	36.0	34.6	31.0	31.0	27.0
7	26.0	35.0	24.0	31.0	23.0	24.0
8	20.0	21.0	26.8	24.0	10.0	11.0
9	12.0	9.0	8.4	6.0	雨雪	11.0
10	13.0	10.0	9.0	6.0	雨雪	11.0

11	13.0	10.0	10.8	6.0	雨 雪	11.0
12	19.0	3.0	12.0	10.0	雨 雪	11.0
13	25.0	22.0	18.2	20.0	雨 雪	11.0
14	17.0	15.0	14.4	12.0	0.0	11.0
15	30.0	32.0	33.3	31.0	26.0	30 5
16	25.0	25.0	25.8	28.0	12.0	24.0
17	41.0	21.0	25.9	23.0	12.0	24.0
18	21.0	43.0	45.0	42.0	39.0	37.5
19	44.0	47.0	42.0	45.0	44.0	38.0
20	—	43.0	40.8	40.0	31.0	41.0
21	15.0	15.0	15.2	13.0	7.0	15.5
22	—	19.0	15.4	15.0	8.0	39.5
23	44.0	44.0	42.4	41.5	38.0	16.0
24	43.0	45.0	41.8	41.0	40.0	17.0
25	42.0	46.0	42.0	42.0	37.0	38.0
26	40.0	41.5	40.0	40.0	33.0	36.0
27	21.0	35.5	32.2	33.0	23.0	33.0
28	30.0	37.0	35.4	36.0	29.0	34.0
29	41.0	43.0	41.0	40.0	36.0	38.0
30	30.0	33.0	29.0	30.0	22.0	26.0
31	—	20.5	20.8	18.0	雪	22.0
32	37.0	37.0	36.5	38.0	36.0	28.0
33	36.0	41.0	34.4	37.0	35.0	28.0
34	—	47.0	—	41.0	40.0	38.5
35	42.0	46.0	40.8	43.0	37.0	37.0
36	36.0	45.0	39.0	43.0	35.0	34.0
37	32.0	32.0	36.0	27.0	35.0	21.0
38	22.0	23.0	22.4	22.0	14.0	27.0
39	28.0	22.0	22.0	20.0	29.0	19.0
40	23.0	24.0	22.0	22.0	14.0	21.0
41	22.0	24.0	32.0	32.0	5.0	17.5
42	22.0	19.0	18.0	18.0	9.0	24.0
43	22.0	19.0	18.0	18.0	15.0	16.0
44	22.0	19.0	18.0	18.0	16.0	17.0

次に面白い事は、老喇嘛が誌したと云はれるる各浴槽の傍に建てられた治效標示の標石柱（又は木柱）である、揚げられた蒙古文字の邦譯を浴槽番號別に現はして見ると第3表の如くである。

此表を見て先づ驚く事は揚げられた適應病症の範圍の極めて廣い事である。私は此の分類が如何なる根據に基いて成されたのであるか其の由來を詳にし得ないのであるから、凡て是等を鵜呑みにしてよいか悪いかは問題であるが、然しとに角喇嘛僧たちが經驗なり又は其他の何等かの理由に據つたものであらうし、一概に是を貶す事なく數歩しりぞいて其

第 3 表　各浴漕の傍に掲示せられた標石（又は木柱）の文字

浴槽番號	蒙古文字ノ譯	治療方法	°C（7月中ノ平均）	浴漕番號	蒙古文字の譯	治療方法	°C（7月中の平均）
1	最冷き溫泉	頭部を洗ふ	1	23	肝臟部各症感冒、房事過多症を治する溫泉	入浴	44
2	最冷き溫泉	頭部を洗ふ	1	24	舊症再發を治する溫泉	入浴	43
3	左眼を治する溫泉	洗面と衣服の洗濯	20	25	瘋癲を治する溫泉	入浴	44
4	右眼を治する溫泉	洗面と衣服の洗濯	24	26	人身5個の主要部分を治する溫泉	入浴	41
5	左鼻孔を治する溫泉	洗面と衣服の洗濯	32	27	人身5個の主要部分等治する溫泉	入浴	34
6	右鼻孔を治する溫泉	洗面と衣服の洗濯	34	28	人身5個の主要部分を治する溫泉	入浴	37
7	口中を治する溫泉	含嗽	25	29	胃病を治する熱泉	入浴	43
8	耳を治する溫泉	洗面と衣服の洗濯	25	30	胃病を治する冷泉	入浴	31
9	肺を治する溫泉	飲用	10	31	食慾を治する水	飲用	21
10	心臟を治する溫泉	飲用	10	32	胃病を治する第一水池	飲用入浴	37
11	脾臟を治する溫泉	飲用	12	33	胃病を治する第二水池	飲用入浴	34
12	肝臟を治する溫泉	飲用	13	34	熱池（他の熱泉入浴し又は是を飲用し病勢反つて加ふるとき用ふ）	飲用入浴	47
13	腎臟を治する溫泉	飲用	20	35	腎臟病等治の熱水	飲用入浴	44
14	9—13諸症を治する溫泉	飲用	16	36	腎臟病を治する溫泉	飲用入浴	44
15	偏頭痛を治する溫泉	飲用及入浴	33	37	腎臟病を治する溫泉	飲用入浴	34
16	咽喉を治する溫泉	含嗽	24	38	婦女血液の硬化を治する泉	入浴	22
17	筋症を治する溫泉	入浴	22	39	婦女一切の病症を治する泉	入浴	21
18	靡痺及腰痛を治する溫泉	入浴	42	40	胃、腸、膀胱、肝臟の諸症を治する泉	入浴	22
19	挫跌、打撲創を治する溫泉	入浴	45	41	婦女の病症を治する泉	入浴	18
20	冷を治する溫泉	入浴	42	42	胃内の結塊及潰瘍を治する泉	入浴	18
21	一切の病症を診する溫泉（チンチール青吉爾）	入浴	15	43	膀胱等治する泉	入浴	18
22	肝臟症等を治する溫泉	入浴	17	44	腿部の病症治の泉	入浴	18

の各を吟味檢討して見たいと思ふ。又そうせねばならぬ事が眞理に對する學者の眞の敬虔なる態度であるべきであると信ずる、標示された多數の適應病症の間に特に面白く讀まれる事は第21號泉所謂青古爾（チンチール）が診斷泉として利用され、又34號泉が湯當りを治する溫泉として指摘せられた事である。土地人の傳へる處によると、來集の人で未だ其の病原を明らかに把握し得ないものは、入湯の初期幾日間は專ら此の青古爾（チンチール）のみに入浴するものであると云ふ、そうすると此の初期入湯の間に自ら自己の眞の病原の存する處が明になつて來るのであつて、此の時に到り初めて此の病所に適する浴槽に轉じて其の病の治療を計るのであ

ると云ふ、今此の事を我々の多年の經驗に徴して見ると、彼の湯當りなる言葉の內に概括せられた複雜多岐な病的現象が、屢々豫期せざる身體部に勃發する事を認めるのであつて、是を學者の或者は舊病症が溫泉によつて摘發せられたのであると說明するのである、若し此の樣な過程によつて現在入湯開始までに何等心附かざりし斯所に病竈の伏在を探知し得るものとすれば、特に此種の現象を能く誘發せしむる溫泉によつて隱れたる病所を發見する事が出來るわけである。旣に幾百年の以前に於て喇嘛僧は夙に此の種の現象ある事を知り、是を利用して病竈を探つたものとすれば實に彼等の卓見に感服するの外はないのである、又湯當りを治する溫泉のある事は本邦に於ても各地に知られて居る事であつて、例へば草津溫泉でのタダレ（皮膚炎）は是を急速に治せしめんと思へば急に去つて附近の某溫泉に入湯すれば速に其の目的を達する事は土地人によつてよく知られた處であつて、又此の種の速治現象は他の土地の溫泉に於ても屢々經驗せられたる事である、ハロンアルシヤンの34號泉などが此の種の目的に利用せられた事は是亦興味深い事であつて喇嘛僧の觀察の精微なる唯々感嘆の外はない。

胃病を治する溫泉として入浴（29及30號泉）及び飲用（32及33號泉）の兩種のものが指摘せられてゐるのも面白い。胃病に效ある溫泉の利用は、多くの人によつて特に其の飲用のみが有效なる如く考へられて居るが、事實は決して然らずであつて、入浴も亦全身作用に基いて侮るべからざる治效を與へ得る事は靜かに實際を觀察するものの知る處であつて、喇嘛僧が此の兩種の溫泉を指摘したのは全く正しい事であつたと思はれる。第42號泉は胃內の結塊及潰腫を治する泉として指摘せられて居るが、是は現在に於て溫泉治療の絕對禁忌と考へられて居る胃癌に當るものであらうか否か此點は更に考究を要する處である。

溫泉利用の方法は入浴、含嗽、飲用、洗滌等各種の方法が採用せられて居る、是亦彼等の着眼の精微なるに感服せしめられる處である。

尙又此處に附記して置きたい事は私が此の溫泉についてベンチヂン反應の有無を檢べて見た事である。此の檢査は本溫泉については且て行はれなかつた處であるが、私の調査によれば湧出直後の本溫泉は明に本反應陽性である事を認めた、是は本溫泉の處女性を決定する上に重要な據點を與へたものである。

其他本溫泉について語るべき種々なる事項も殘されてあるが紙面の冗費を怖れて玆に割愛する、然し上記の事項丈けでも本溫泉が溫泉治療學上種々なる角度から甚だ興味深く且つ示唆に富むものである事は否定し得ないと思ふ、敢て江湖に紹介する所以である。（昭和16年12月）